

Performing Arts Review (19)

山口百恵さんが「伝説」から「神話」になったとき

平成 22 年 10 月 6 日 中野 希也

私は山口百恵さんについて 2004 年以降本誌に三回寄稿したが、その都度もう一度だけ見たいと思いつけていたシーンが二つある。

ひとつは、1978 年頃帰宅し靴を脱ぎ居間に飛び込みチャンネルを切り替えたとき、彼女のバックに歌舞伎衣装の役者が舞っていた。伝統芸能とアイドルの融合、それは何の唄だったのだろうか。

もうひとつは、80 年 10 月 6 日の最後の TV 出演を報じた記事の末尾に「この日、同番組の制作スタッフが一人退社した。個人的理由のため退社を決めていたが、百恵さんの最後の出演までと半年延期した」とあった。40 代のスタッフがそこまで入魂してつくったステージの数々をじっくり見てみたいと。

「夏ひらく青春」から「さよならの向こう側」まで
「山口百恵 IN 夜のヒットスタジオ」

日本武道館でのファイナルコンサート翌日に生放送されたあの感動の特別番組など、
数々の伝説シーンも収録した完全保存版。

125 回の山口百恵歌謡シーンは超圧巻！

この広告を見たとき、私は躊躇わず発注した。今年 6 月 30 日に 6 枚組み DVD として発売、7 月 12 日付けオリコン DVD では 16,000 枚の売り上げを記録した。引退後のアーティストによる映像がトップ 3 に入るのは史上初めての出来事である。

まず若い世代の読者のために説明が必要であろう。

山口百恵さんは、14 歳のときデビュー、わずか 7 年半のち引退した。レコードの売上は、シングル盤 31 曲 1700 万枚、LP 盤 45 曲 500 万枚、カセットテープ 39 巻 170 万巻。ドラマにも出演し、映画は 17 作品 2800 万人が入場、TV ドラマ「赤いシリーズ」－「赤い迷路」「赤い疑惑」「赤い運命」「赤い衝撃」「赤い絆」－の視聴率は平均 30%であった。同時に時代を表徴する国民的存在であり 3 大新聞社が発行した「20 世紀クロニクル」の 1980 年版の表紙は、全社が百恵さんのファイナルコンサートの写真である。最近では大手新聞社の発行する週刊誌の或る地方政治家をとりあげた記事の中に「彼は 1959 年生まれ。山口百恵と同年生まれ」とあった。

「夜のヒットスタジオ」とは、1968-1990 年の 22 年の間、フジテレビ月曜日夜 10 時から 1 時間放送された同時代の代表的音楽番組であらゆるジャンルの歌手が出演した。

この DVD 全集を見て印象に残ったシーンをいくつか挙げてみよう。

78/10/16 「絶体絶命」(阿木耀子作詞・宇崎竜童作曲)

「連獅子」があらわれる。舞うのは「歌舞伎稚魚の会」会員2人。一般人に歌舞伎役者になる門戸を広く開けるためにつくられた国立劇場歌舞伎研修修了生から成る。

連獅子は本来、能「石橋」を題材にした「石橋物」と呼ばれる舞踊のひとつで、霊獣といわれる獅子が現れ、牡丹の花に戯れたり、豪快な踊りを披露する。親獅子は白頭、子獅子は赤頭で、いずれも長い毛。役者は首から伸びた毛を手に持ち「毛振り」をするものであるが、このステージでは、ひとりの男に決断を迫るふたりの女を表現する。

♪三人模様の絶対絶命 さあさあ さあさあ はっきりカタをつけてよ
はっきりカタをつけてよ はっきりカタをつけてよ その人と私のどっちを選ぶの♪

花吹雪の舞うなか、彼女をはさんで紅白の獅子が見得を切る。さあさあ さあさあ。



79/7/30 愛の嵐(阿木・宇崎)

♪炎と書いてジェラシー 二人でこうして一緒にいるのに
ルビをふったらジェラシー あなたがどこかへ行ってしまいそう♪

歌舞伎「紅葉狩」の鬼女が杖を持ち百恵さんに襲いかかる。百恵さんのアップと火炎隈のフラッシュが交錯、やがて百恵さんの歌に負けて退場する。



79/8/20 しなやかに歌って(阿木・宇崎)

舞台に大樹、全ての枝に蝋燭、その数約200本。百恵さんは純白のドレス、白い髪飾り、白い上着に蝶ネクタイのホテルのサービスマン6人がキャンドルに灯す。

♪しなやかに歌って 淋しい時も しなやかに歌って この歌を
飾りを捨てた 心のなかで あなたの名前呼んでいるのです♪

80/10/6 ファイナルコンサート翌日の引退特集番組

百恵さんが最後の曲「さよならの向こう側」を歌い終わったあと、番組の関係者・製作スタッフのひとりひとりが一輪のバラの花を手渡した。その列がいつまでも並ぶ中で放送は終了した。百恵さんの最後のTV出演はこうして終焉を迎えた。

女性司会者はこの放送につき、「いつもはスタッフ達の怒声も飛び交い、にぎやかなスタジオが、この時はとても静かだった」「番組が終わった後も、みな去るのが辛く、VTRも回しっぱなしでお別れ会が続いた」とスタジオの様子を振り返っている。

80/11/19 母の誕生日に結婚式を挙げる

「先ほど式を挙げましたが、牧師さんの聖書からのことばを聞いて胸がつまる思いでした。今もドキドキして何を言っているかわかりませんが、新しいスタートラインに立って、そこから第一歩を踏み出してゆくつもりです。私なりに精一杯、三浦稔という男性の妻としてやってゆきます。」このインタビューを聞いた五木寛之は感想をこう記した。

「自分の本当に言いたい気持ちをビシッと言葉に翻訳していく作業がああ年齢で どうしてできるんだろうと思っていた。歌を歌わなくてもすごい人だな。」

中学二年でデビュー、わずか七年半の歌手生活の間にアイドルから国民的シンガーとなり数々の名曲を残し、人気絶頂で引退する。どうしてこういうことができたのであろうか。

1 他人のためではなく自分のために歌った

「誰のために歌っているんだということ、本当は自分のためなんですよね。それが、いったい誰のために歌っているのかということがわからなくなってしまうときがあるんですよ。“歌っている”というより“歌わされている”という感覚になっちゃうときが私にも一時期あって、それを乗り越えたときに、“ああ、やっぱり私は自分のために歌っているんだな”と思えるようになったんですね。」（インタビュー）

2 歌いたい曲を自分で選んだ

宇崎竜童に、さだまさしに、そして谷村新司に作曲を依頼し「横須賀ストーリー」、「秋桜」、「いい日旅立ち」が生まれた。若い彼女の希望をそのまま叶えたスタッフも素晴らしい。彼らを納得させずにはおかない何か百恵さんの内面にあった。



3 練習に練習を重ね、まるで作者が憑依したかのようであった

「百恵さんは非常に忙しいスケジュールでしたが、いつも音楽を勉強しよう、歌い方を吸収しようとしていました。レコーディングの早さも驚くばかりで、事前に渡した歌はちゃんと覚えてくるし、時間がないときでも、その場ですぐに覚えて歌いました。普通は一曲録音するのに3時間くらいかかりますが百恵は一曲一時間。2時間で三曲終えることもありました。ただ、一度だけ、婚約発表直後だと思うけど、フワフワ浮ついた雰囲気が出て、可もなく不可もなく、という歌い方をしたんです。それで、僕はその日のレコーディングをやめてしまった。“いつもと違う気がする。明日、もう一回やろう”と言ったら、百恵も一瞬ムツとした感じはありました。でも翌日、歌い始めたら、めっちゃくちゃいいんですよ。マネージャーに聞いたら、帰りの車の中で悩んでいました、今日は朝6時からロケだったので、寝てないと思います、と。本当に感動しましたね。多分、百恵に僕への信頼がなければ、“何言ってるのよ、えらそーに！”で終わったと思うんです。本当に嬉しい出来事でした。やっぱり百恵は、山口百恵という、テクニックも表現力も十分にある本当にビックな歌手だったと思います」（レコードディレクター）

「プレイバックパート2みたいに、きょう渡して二日後には歌詞を見ないでテレビで歌うということはずいぶんあった。勘がいいな、とにかく。百恵さんの咀嚼力とか表現力とか、独特のものを持った人なんです。だれよりも勝るといっても、だれにもないという言い方が正しいと思うんです」（宇崎）

百恵さんの世界は第三者の容喙を許さない。作詞家阿久悠は後年こう語った。

「山口百恵のための詞を一篇も書いていない。『スター誕生』というぼくが企画にまでかかわっていた番組で、ぼくが審査員をして誕生させた歌手で、しかも、毎週のように同じスタジオで顔を合せていながら、親しく話をしたこともなかった。遠いのである。それは、彼女に凜としたものが備わっていて、軽々しく声をかけられない雰囲気があったからで、彼女は十四歳、こちらは三十歳を越えているのに妙なことだが、恐かった。今もって怖い。」

3 芸能界は「三浦友和」に出会うためにだけ存在した。

芸能界か、それとも一人の男性かという選択肢は初めからない。芸能界イコール彼だった。「友和との交際が大騒ぎになっていたころ“どうなのモモ?”と聞いたことがあります。それだけで彼女はすぐにわかり“友和さんが私の100%です”と答えたんです。ニコリともせず、まじめな顔で堂々と。私は“100%”という言葉に、ひっくり返ってしまいました。普段は、そんなオーバーな表現などする子ではないですから、これは本心なんだなと思ったので、もうそれ以上は聞きませんでした。人が長い間をかけてすべき苦勞を、子供のときに経験してしまったから、苦勞した分、他人に対してクールになれたのでしょうか。だからこそ、ああいう潔いやめ方ができたんだと思います」(TV番組チーフ・プロデューサー)

「結婚を機に家庭に入りたいと切り出されたときは、我々のマネージメントが、家庭の魅力に勝てなかったという、ある種の敗北感がありました」(プロダクション社長)

彼女のために68曲作曲した宇崎竜童以上に百恵さんを語ることはできないだろう。

「宇崎・阿木だけでなく、プロデューサーとディレクター、編曲家、宣伝担当、そして本人。全員が誰もが譲らないで勝負をしたのだと思います。『山口百恵』という頂点に向って、みんなが100%力を注いだのだと思います。それに10代の百恵さんが応えたのです。」

最後にファイナルコンサート・ライブより百恵さんのMCに耳を傾けたい。

「横須賀ストーリー」阿木耀子作詞・宇崎竜童作曲

“風の香り 潮の音 夕焼けの色 坂道 遠くに見える海 学校 図書館 友達
みんな 私の中では 八年前あの街を離れたときと 少しも変わらない姿で残っています
私のなかで あの街が ふるさと そう呼べるかぎり あの街はかわりなく
私を迎えてくれると思います
なぜならば あの街は 横須賀は 私のすべての原点だと思うから “

♪これっきり これっきり もうこれっきりですか
これっきり これっきり もうこれっきりですか
街の灯りが映し出す あなたの中の見知らぬ人
私は少し遅れながら あなたのうしろ歩いていました
これっきり これっきり もうこれっきりですか
これっきり これっきり もうこれっきりですか♪



私がこの歌を耳にしたのは1976年、半生以上にもなる34年間をこの曲と共に生きてきたことになるが、昨日のように感じる。